

うたそら

第
12
号

2023
January
1

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠	03
テーマ詠欄 「温」	18
一首評 「そらよみ」	22
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	24
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	26
次回予告・編集後記	27



第12号

緒方燕柳	@io_sakuramochi	鶴橋政	@takahashi_ty5	水セ	@m_iya_o
小崎ひろ子	@hitoritsukimiru	探偵のホックルキー	@L_L_lawliet_	御園りゅう	@myao_rr
音平まほ	@nandemonaih16	千葉	@a_oneko	深山睦美	@57577_77575
歌島孟	@Sinn1990	千原いはる	@kohagi_tw	坂武一俊	@mushtake
涸れ井戸	@kareido1111	月草健津久	@moon_grass12	六厩めねり	@mereumunmai
河岸景都	@kate_kawagishi	とおえ夕夏	@croissant_heyz	村田一広	@mucci2022
北谷雪	@kitaya_misomiso	中村成志	@nakam8	杜野詩季	@4kitanka55
君村類	@kmnr_r09	奈瑠太	@nald_a_aa	ゆうじ	@b7282e_akaneiro
玖嶋やくみ	@sacula_tanka	西燎子	@jacky244Ray	龍翔	@oppizuntuan
麻倉ゆえ	@AsakuraYue	熊谷聰子	@ataoka2lib1	れいあわ	@re14m_bot
阿部蓮南	@renalt815	くらだたけ	@tkuro2016	朧	@rou_tanka
雨虎俊寛	@amefurash13107	くらだたけ	@bonko_san	西村曜	@Cathy01207758
有村桔梗	@chattenoire_k	小泉キオ	@kiokoizumitanka	西村曜	@nsmrakira
歩歩	@subjperf	咲兵衛	@kozumi_yau	西村曜	@aieOhimeco
池田竜男	@tankadragoman	佐藤水魚	@izumitakeishi	西村曜	@re14m_bot
石川順一	@Hitler57	汐射ハルカ	@satochio_tanka	西村曜	@rou_tanka
一色凜夏	@88rinrin23	西鎮	@haru_c17h17c12n	西村曜	@Cathy01207758
宇祖田都子	@Shinnsyutu2020	雀來匡	@jacksbeans2	西村曜	@re14m_bot
泳一	@Eishimada	十条坂	@10key333	西村曜	@rou_tanka
hs	@hs welt	白石夜花	@yohana_no_sekai	西村曜	@Cathy01207758
江口美由紀	@miyuki_eguchi	寿司村マイク	@xHk5bNR4wv1wj8M	西村曜	@re14m_bot
大坪命樹	@OotsuboMeiju	泰源	@taruzon	西村曜	@rou_tanka
		たえなかたか	@suuzuzu2009	西村曜	@Cathy01207758
		多香子	@mae_k	西村曜	@re14m_bot
		御米わづ	@MEATsachi	西村曜	@rou_tanka

74名
たへやんの参
あこかへやこめやー

あや子

河岸景都

北谷雪

君村類

玖嶋やくみ

麻倉ゆえ

阿部蓮南

雨虎俊寛

有村桔梗

歩歩

池田竜男

石川順一

一色凜夏

宇祖田都子

泳一

hs

江口美由紀

大坪命樹

ツテールの恋人

あや子

好きじゃないひととも話す笑い合ふえらいよみんなよくやつてねよ
メカニズムなら知っている大抵のことにはちゃんと理由があるのに
異国語が弾むトトールのテラスで最後にしたキスを思い出す
ここからは見えない星の瞬きをとらえたい 1. 0とかじやなく
快速を快速じゃなく急行とすんなり言えた自分に気づく
理由なんてなくてもできる安心があるならひとつ、ティクアウトで
この駅で会つてもおなじ体温ひとつよしで抱きしめてくれるから
宇宙には宇宙ステーション 僕らには居心地のいいコーナーショップ
夜が更ける前にシチューを食べきつて栄養のある私で会うよ
人生はまだひとつぶん色はまだ変わるアソートのさくらんぼ餅

君と紅白

阿部蓮南

連作欄 #うたそう

紅白をしようよ 君は純粹な、私は熱い声の持ち主
「白餡のたい焼きのみと食べたい」を携帯に入れやつぱ生きたい
食欲はいつからだつて青春だ好きかもつて日のヤンニヨムチキン
ロハセリでポテトチップスばかり見る君は世界で塩の結晶
この量がちようどこいつてわかつても恋をたくさん味わうカルピス
この円をはみ出でしあうピザソース君に会えたら持ち手ができる
夜が更ける前にシチューを食べきつて栄養のある私で会うよ
人生はまだひとつぶん色はまだ変わるアソートのさくらんぼ餅

あおによし何度もお辞儀する鹿にきみと何度もお辞儀を返す
花街をいまも残してならまちに浅紫のスナック看板

打ち水に葉を濡らしたか大きめの睡蓮鉢に雲は映つて
石仏のあいだいに桔梗揺れこの旅はもうきみのまにまに
ふじ色のお猪口受けとり春鹿でわりもしない利き酒をする

軒下の身代り申に上気した頬寄せたからF値を下げた
まじないに摘んだばかりの紫陽花がお手洗いには吊るされている
町家カフェの格子を通すやわらかい光の入る午後3時過ぎ

誰が誰でもいいような冬の名駅になぜかわたしが見当たらなくて

歩歩

惰眠のせいで

気が触れたような風音 ビー玉の中昨日より綺麗に見える
日が落ちて誰かが闇を撃つまでの8を寝かせた無限のような
どうやつて寝ようか迷う天井にむなしさの落書きが嵩んで
ラップバトルを聞き漁ったサーバログ すぐに鼻呼吸が苦しくなる
耳に水 アンチテーゼもありきたりになつて1匹のキリギリス
脱いできたチアフルがまた冷めていく夜の見えないロッカールームで
役に立たない夜の暗さが、なまなましい明け方の暗さが、惰眠のせいで
メランコリー 健やかなる被弾を終えて逃げていく寝台の記憶

力ワセミを見た後に

石川順一

東京が街を走るは慣れぬれどカーナビに迷ひ渋滞嵌まり
僻事にて旅行支援の効かざるも反骨にそへばあなむがしきかな
青山の岡本太郎が生家へといと瀟洒なる街路を歩く
記念館 抽象塑像と青き木々 太郎が色せるアトリエ家屋
よべ深くいねられざれば暗きに起き早くブースをしつらへつれづれ
客おほきをわがブース前いらつしやいと閑古鳥ども鳴くがごときぞ
拙著買ふ少なき客の楽しげなる文学フリマに上京せる甲斐
わぎもが著の厚き本こそ売れにしか 数売れしよりめづらしきかな

サマセットモームの意志を推測しアイリスの花を好きでよかつた
葉が落ちる岩にメカ図の紙を置くカワセミが水路をすれすれに飛ぶ
波長合う人や物には枠が有る乱れた髪を櫛で整え
騒ぐのを止めた鳥たち森林にワサビの畑が有ればよろしも
勃興のニューオーダーは歌うべしニューバランスはケセラセラかな
屋根の上上弦の月が見えて居る食パン食べてカフェオレを飲む
入刀の後に祝福する鳥が冬空へ戻り雲が無くなる
えのきだけもやしとキャベツが入るラーメンビールと日本酒どちらを選ぶ

屋上摸部XII

宇祖田都子

閑古閑古、われ觀光鳥

大坪命樹

指先の乱数表が指示示すオオアリクイの反逆の歌
ちつぱけな惣菜食べた口笛の影絵でつくれ迷宮回廊
避雷針鞭打つヴァニラ鉱物の結晶キック奇妙な神話
白い襟胎児の頭部にある寝癖ペーパーワイト冷たい泉
片思イ受胎感覚輪唱ス潛水艦ニ似タ猫目石
片方の乳房は死後の月めいて寒いホームに南洋の夢
無意識が耳たぶを卵焼きにするジャン・コクトーは靴のつま先
光るもの海のけだもの群れるもの发声練習するかたつむり

戻れなくなる

江口美由紀

冬の運河

小崎ひろ子

実家でテレビのへやと呼ばれていた場所は恙なくテレビのへやでした
軽トラに三基ならんで冬晴れの墓石店頭展示販売
なくなりそうなシャンプー洗剤歯磨き粉全部あなたが先に気がつく
ねえ、やめといた方がいいよとボックス席の向かいの人が隣の人によ
ゆるせなかつた記憶を三つ放したら小枝に引っかかるてうるさい
結婚記念日はクリスマスで土曜日で奥歯の治療の予約があつて
ほどけたら戻れなくなる風の日のわたしをブーツの踵に嵌める
誰が誰でもいいような冬の名駅になぜかわたしが見当たらなくて

映画はてて街に出た時めずらしく時雨の降り方で雨降り出しう
道筋を示すスマホは明るくて予備のバッテリーが時折重い
クルーズの半年前のパンフありコロナが止めた時間ここにも
そして運河の駅を越えたら百船町といふ地に浮いて一艘の舟
雨宿りしつつうつろに空を見るわれらに扉を開く歌人
まれにかういふ事はあるので驚いたりしないのですが地図に兩粒
今年死んだ人のことなど映し出すテレビの後に踊る若者
たぶん今は戦後なのでおまつりだ空き巣がねらつてるとか歌つて

工芸

佐藤水魚

砂丘地

西鎮

円卓で北京ダックと叶わない夢を削いではきれいに包む
昏睡の手水鉢から花あふれ愛されるしあわせに溺れた
手をつなぐ代わりにくれたリスクが頭をひどく冷やしてくれる
やさしさの暴力だって分かって今日も黙つて右頬を出す
存在のひとつひとつを確かめて冬の窓から漏るハンドベル
白百合を纏う乙女のリトグラフ 純潔の湖に溺れたかつた
長調の色味を帯びた疾風が憧憬の綾をたやすく解く
明け方に穢した喉をふるわせてふたりのためにうたう讃美歌

「徒然」とタイトルつけたアイドルのブログを閉じた主治医の回診
「徒然」の娘の言葉がiPhoneに拡散されるをベッドで知る朝

冬初むる

汐射ハルカ

JAZZ

雀來豆

踏面の浅い階段崩れおり外人坂は音もなく秋
いつまでもひとりきりだと知る朝に呼ぶ声がする微かだけれど
下草に埋もれ日陰に咲く花は誰にみられることなく枯れる
鈍色の空の到来見上げては朝に白百合はなさき香る
雪雲は層状にして迫り来るアップルパイは劈開をして
順調に降り積もりゆくこのまちにいらぬものを消し去るよう
堰に立つ洗剤の泡消えてかない背中の要らない体温うざい
冬初むる夕ぐれ舗道なみだいろほんとうの恋むねの片隅

おやすみなさいかうあけまして

十条坂

引き潮

たえなかすず

おやすみに守られている日もあつた未読のままのメッセージをなぞる
またひとつ古びたわたしのひとりごと おはようが夜を打ち消していく
あなたには私は見えないでしようはじめまして、はじめまして、を
ここにちはどんな一日か知らないが青天に踊るタオルの群生
のぼり坂だけの人生やつほーと言えば返つてくる声、やつほー！
さよならが人生だという、さようならすべての季節を書き置きにする
今日くらい職場を好きになってやる良いお年を！を定時に配る
あけおめと言わないといねいなあなたが今年も変わらなかつた、うれしい

僧伽藍バーン

寿司村マイク

初春の

多香子

東大に数人入る仏教系高校講師と僧侶を兼ねる
春の陽を伽藍は貯めて静かなる住宅街の境内に梅

副担の生徒の親にはねられて一週間の入院となる
欠かさずに毎日変えてた一昨日の今日の言葉を貼る掲示板

書道部で臨書に励むO型の娘が広げる全紙のしろさ

立ち止まる市民のわかりみ門前の娘に過ぎないはずの名前

テキトーな娘の言葉がiPhoneに拡散されるをベッドで知る朝

「徒然」とタイトルつけたアイドルのブログを閉じた主治医の回診

初夢の船長さんはアザラシで冰山みつけアウアウと鳴く
年替わる真夜の静かな音を聞く誰もが思う明日の明るさ
この頃は近所の猫の毛並さえ知らぬ都会の高層マンション
窓際のぬいぐるみサメに替えてからファーファー言つて威嚇する猫
目白来る春は遠くて向き合いの炬燵で白菜なべを食べる日
奇術師がシルクハットから出してくるウサギのような愛をください
冬の日の段々畑にみかん搖れだんだん遠くなる故郷よ
春に向け二人の馬車は雪道に強い気持ちの轍をきざむ

マグカップの持ち手のアールいつだかの歩道橋からみた街の灯のか一ペットはわずかに錦埃をたててゆつくり忘れてゆくひとがいる
トイレットペーパーが切れラックから芯をはずしている 挫折とは
冬の砂浜によこたわるベンチの背もたれに褪せた文字列ひとつ
あのライトフレイドタツチアップされた記憶は消してあげられなくて
告白のこつを教えてくれたけどたぶん使える日は来なそうだ
確かあの小山の向こうは砂丘地でいつまでも忘れないあなたを
古い橋の欄干撫でてこの街はまたすこしだけ遠くなつてく

So Long Eric タイムラインに放たれる無数のハートマークの連なり
黒鍵の鱗をたどれば届くのかピアノのなかのやわらかい場所
たまらず塩ピーナッツを吹きだしたディジー・ガレスピーの頬っぺた
坂道を転がり落ちる鞄から古い楽譜をひらひらさせて
ドラマーが歌手を兼ねるからつてくり返すピアノマンの暗い口腔
バスクラリネット鳴らせ、鳴らせ、わたしはここにいてあなたは遠くにいるのだから
水無月ぼくら魚のように沈黙しビル・エバンスの水玉を聴く
行こうぜぼくら永遠のぐるぐる団みたいな名前の歌だきしめて

いいねゼロだから自分でいいねした青春みたいで可哀想でしょ
悪いことばかりじやないよ悪い人ばかりいたけど 寄りかかる癖
街に雨教会に鐘、樹には風 罪は携帯電話の中に
風景のすみにごみ箱 老けたねえ、元恋人とキスをしながら
真冬には真冬の昔話する頭上の翳る月をあなたに
CMをまたいでふたたび繰り返すテレビのようにしつこい別れ
だめ、今は女優ですから大盛りのライスと共に照らさないでよ
ファミレスの灯りが暗い今夜こそ愛の世界が終わつてほしい

妻の祖父の住みし家にて暮らしたればわが子は妻の血を引くと知る

花見にて団子を三人して食ひき出産前日とも知らずして

妻のゐぬ広き家にてわれと子と寝入りたりけり出産の夜

コロナ禍にて付き添ひはなく妻一人息み息みて子を生みたりけり

子が生まれ夜中に電話ありたれどわれは寝てをり朝に報を受く

わが父の生日の前に生まれたるわが子の名には父ゆかりの字

幼子が嬰児に遭ふ日が来たりスマホの画角に二人を收むる

嬰児の軽さを忘れぬたりけり小さき湯船に体を洗ふ

彫り起こされて

千束

ブラックアウト 暗転 なじんだ毛布をひろいあげふいに世界の足音がする

死んだから神になるのに生きている人をよすがに歩いてしまう

この唄をいつか忘れる手をつかみ天国さえも乗り過ごすから

ああ幕間 縫いとめた目をほどかれてブリキの心も残機もなくて

ティーカップはげしく割れてあなたからこの世のすべてを奪い取りたい

われら怨嗟われら地獄の守り人と夜より暗き裾ひらめかせ

あのひとに触れられ彫り起こされたのに不揃いになる髪先つまむ

カーテンオール 閉幕

ろうそくの呼吸ゆらめき来世でも出会うのだろう

雨のち雪ときどき君

月草 健津久

あの雲を怪獣、戦艦、龍、鰐思ひ描いた遠い夏消ゆ

冷めるまで雨は盲目凍りつき白く染まつて雪になる恋

「また明日」言ふたび胸に寂しさの風が吹くから君が大好き

君の飲むコップの水をぶち撒けたい服乾くまであと少しだけ

夕さりて蟬の聲引く凧のやうに君の手をひく誰そ彼の闇

「傘がない?」ごめん母さんでも聞いて無くしたからこそ濡れず帰れた

一度でも枯れてしまへばもう二度と逢へない君は花より僕い

夜の川に落ちるさらさら星月を映すあなたの色が知りたい

クラミツハ（二）「祈る」

ともえ夕夏

ギアが碎く

中村成志

七日後の運動会は雨だらう祖母は薬も飲まず咳き込む
未熟ゆえ祈る技術もなく空を仰ぐしかないクラミツハの子
学校が灰色に俯いていて母に一から祈りを習う

雨雲の重さをずしんと両肩に背負いはじめて振るう大幣
よわつちいわたしを囁く雨音と榊のぱきんとしたみどり色

三日間籠り通したその間に英語と理科のノート届きぬ
しづやかな忌火のむこう暁がわたしの呼んだ朝が明るい

ああ晴れた 晴れたけれども多分もう十メートルも走れやしない

Happy Birthday

奈瑠太

ほんとなら越えるはずない歳の差を超えてしまえることに震える
もう君は年をとらない わたしだけ高野豆腐の末路を見るの
ほんとでも嘘でもいいよ 終のとき君の隣りにいてくれたひと
さみしさという結び目をやわらかくしてくれたひと 花を重ねる
義理はないけどありがとう 湯に足をほどぼすように心が笑う
ハピバつて毎年送つてたLINE 空に歌えば星がこたえる
百八十七センチから見渡した阿佐ヶ谷の夜の終わりをみたい
笑い声耳でころころ鳴つていて好きだつたつて光る残像

おはようとペットボトルを弾いてたらウサギの群れが花を濡らした
ぼくたちは白湯のお湯割りとか飲んで長生きしちゃうタイプなのです
野良猫で顔を洗えばメモ帳にオパビニア、オパビニア、オパビニア
ドーナツにモザイクかけて！牛乳に目標ばかり食べさせないで！
履歴書の特技の欄に歯磨きと返信をするイグニッションよ
トイレットペーパーにキスしてました？郵便物は悪くないから
寝不足の入浴シーン。ラジオにも教えてあげる檸檬の書き順
占いの監修がノストラダムスで強くなりたい いつてきます

大きくなれる

西村曜

ハンドクリーム、とてもきれいに寝転がる夫の首に塗りたくつて
白いものばかりの鍋を食べ夫、あなたは水鳥に違いない
ここだつて死後じゃないのかじやがいもを多めの油で炒めてるけど
恥というややきみどりの感情を見せたくおもうきみどりなんだよ
あなたならわたしの稻光になれる なつて 地表を驚かせてね
地上絵のタトゥーまぶたに入れたいな大きくなつたら大きくなれる
半額のローストポーク オメでどう あなたにわたしに名前があつて
Twitter 凍る夜更けがいつかきてマスクメロンのマスクつて誰

冬の陽だまり

薄荷。

ほろほろとブールドネージュ嗜みしめる白くて甘い冬の陽だまり
窓際にふたつ並べて置くための飴色ラタンの小さな丸椅子
軽やかなローゼンタールの野の花のカップで冬の紅茶を飲みほす
街路樹はすっかり裸で冬の日は呑気な顔で夕暮れていく
残業のあなたの帰りを待ちながら鍋のシチューはゆっくり冷める
ラの音が半音くらいずれていて民族音樂めいた鼻歌
爪までも青い回遊魚になつてふたりで星の夜を揺蕩う
カーテンも開けずにだらだら眠つている事後報告のような休日

みそか

早月くう

ロールプレイングライフ

羊葉零

うつくしくすれ違う日々この街のひとの遠さを好きだとと思う
あざやかな越境 きみは無駄のないフォームでドアをすり抜けてきた
まひるまの半月だから満ちるはず 予定ではなく予感が欲しい
淡々と向かい合わせに窓を拭くとおい未来の祈りの所作で
運命線見つからないね、手のひらは裏側なのにひかりが似合う
昼と夜のあわいに影はただずんであと何十年分の夕暮れ
きみの手で再び花にひらかれて蜜柑畠のひかりの最期
みそかみそか、きみを最初に笑わせるひとがわたしでありますように

君達に教わつたこと

日笠山

白について

夕虹は死者となりたる祖父の橋月虹をゆく祖母に追いつけ
逆再生するように雨傘をたたむ今ピアノを諦めた
答えるよ鳥の目ヤニはどれぐらい大きいんだ自由の女神
絶対に貴方は死ぬのだから好き死はない貴方ならば嫌いよ
染み渡る焚火の熱はイリーガル夜明けにブレーメンを目指そう
パンジーの畑にずっと立つてなさい そこに線路が敷かれぬように
バラをバラとはじめ言葉にした人は「馬鹿」という漢字を使わない
この風をゲーゲル翻訳にかけたら「貴方の恋は素晴らしいです」

廣珍堂

白線はセーラー服の襟にぬてただ真つ直ぐに未来へ進む
電停に群るる男子の夏服が蒼天に撒く汗のエナジー
白磁には刺身のあの血は固く海の音にも水とならずや
逢瀬するひとの白髪の増えるとも迎ふる朝の温もり増せり
窓からは薄き白知る雪の朝薄き布団はまたたくに冷え
都会ではゼブラゾーンの広くあり彷徨ふひとの中へと入る
山肌にはつかな雪を見る朝の盆地の底の通勤電車
故郷は白に埋まるる記憶のみ胸の底にていよいよ固し

ふたご座の流星群を浴びた夜は見知らぬ兄へ手紙を書こう

古文書の文字をたどりて読み解けば黒きひとみの女人おとずれ

ベーコンとネギましましの目玉焼きさあ純粹の大根おろす

菊芋のシャリシャリという食感は辛さを抜いたショウガのごとし

いつもあるものではないぞ電気とは演説のあと冷蔵庫へと

靈感の葛原妙子不可思議の奇妙な歌も日常の詠

新年のことを写してしまひこむまた一冊の文庫手帳を

年々に割いては散りてさくら花うちの嘆きのひびわれる音

年末旅行2022駿遠

福山桃歌

自転車

御糸さち

ひのとりが降り立つホーム メタリックレッドが青い夜明けをはじく
特急の大きな窓はモニターで知らない誰かの生活を映す

掛川も新富士もまだ静岡で三島も熱海もまだ静岡で

絵に描いたような山だな富士山はどこで見たつて鮮やかな山

東京に向かう電車をぼんやりと見送る世界線の内側

とおとうみ朝のひかりを吸い込んで旅の途中の空はまぶしい

トーマスとバーティが競争する町をあの頃の君に見せたかつたな

新大阪行きのひかりが照らしだす何処かに帰るひとの横顔

咲き初める夜

水也

国威発揚バーガー

深山睦美

終焉の野に咲く百合は優くてかなしさを抱くそこで待つてて
不定形した腕より仄淡く誰かの愛が滲んでいたよ

人形の夢は絶えなく月明かり差し込むだけのつめたい部屋に
あしたには終わりにできる言い聞かせ棘を飲み込む血を吐いている

紡がれた糸の先へと落ちてゆくまだ早いよとだれも言わない
遠い空浮かべて綴る言葉たち嘘ばかりで傷口にじむ

からっぽのカップをひとつなぞる指ここに誰かがいたことはない
記憶から抜け落ちていくさみしさは真冬に咲いた花火のように

東京モナムール

宮岡りょう

鈍痛

虫武一俊

付き合うと言われぬままの恋が増え 大人が自由とは限らない
女性用メンズステッツをくださいと言えば戦闘服が出てくる

働いて家に帰ればただ眠る 床に積まれた本とスニーカー

友達の結婚、出産、昇進を素直に祝えるうちに死にたい
おめでとう、結婚したのね、元の鞄、おめでとう、ああ、さよならあなた

仕事ではわたしの代わりいくらでもいるからせめてあなたくらいは
選ばれないほうの高橋さんとして今日も最終面接にいる
東京のどこかでわたし生きてます。迎えに来てね、地下鉄に乗つて。

誰のことも手助けしない同僚といて冬ざれの並木の静か
人柄は良いんだけど能力とやる気がない 吐く苦い飴
やつぱりなつてことが起こつて日本海側からここへ伸びる雪雲
運河沿いに喫煙所ありみな同じ方向を向く喫煙者たち
清掃に濡れた作業着 真下には環状線の天王寺行き
重たげに鯉が水面を跳ね上がりこのどぶ川に生かされるもの
欠けている部分を埋めるためにただ向かい続ける職の現場よ

「こきげんよう。ヤマトの諸君」の余裕さで寝坊してくる新人(二十歳)

お気楽に「ポチッとな」って押した故消えた画面に浮かんだドクロ

心では「逃げちゃダメだ」が嘯くが定時で抜ける目論見をする

「まだ、まだ終わらんよ!」って残業を延ばす課長は血まなこの赤

日曜の朝の「デリシャスマイル〜!」を聞き流し食む焦げたトースト

「見ろ人がごみのようだ」と呟いてしまう独りの観覧車にて

「後半へつづく」といわれ掛け捨ての医療保険の見直しをする

「あんたバカア!?」言われてみたい夜もあり枕とともにエヴァを見ている

マスクして歩く母娘がそつくりでマスクの下も見てみたくなる

この辺はむかし羽前と言ったとか Uzenなんだかとても強そう

旧県庁議事堂だった洋館で結婚式の前撮りと違う

絵葉書のように撮れた新郎と新婦おまけに写真屋さんも

村山の古民家はみなそつくりで売りに出てる茂吉の旧居

金持ちにおれがなるまで待ってたら聴禽書屋と名付けてあげる

積もらない雪でよかつたこの町の余韻をそつと目に焼き付ける

「やまびこ」に「つばさ」が生えてここからは全速力で向かう東京

クリスマスはお早めに おRDし上がりください

村田一広

クリスマスはお早めに

おRDし上がりください

村田一広

カタロゲのケーキは拡大されてゐた現物の小ささに泣くクリスマスマネキンが細部までリアルでせう？ 失踪した姉に瓜ふたつコンサートの舞台アイドル遠すぎて三次元とも二次元とも大きさを競ふやうなる梨・りんご今日りんご勝つ八百屋店先取り込むのが惜しくなるほど美しい夕焼け色にたなびくシーツ雨降りのアドリで君と二人きりつねに満たしておく雨の音（戻れるか）（たぶん戻れる）足先から吸ひこまれゆく地下の迷宮一年前ケーキを買った真つ暗な廃墟をよぎるクリスマスイヴ

蓋はいらない

ゆりこ

菜の花を湯がけば数多の満月が浮くゆりかごのような雪平油麩をぬるま湯でもじす浮いてくる夏の陽射しのようなキラキラ煮え切らぬ返事に沸いたいつだつて鯽の煮付けに蓋はいらない白菜に重ねた嘘が滲みだしてクタクタになるまで煮てしまふグラタンの皿に残つた汚れとか気になつてているけど気にしないカロリーは気にする人の諦めと甘酢をからめる鶏の唐揚げその人は静かに暮らしていきたいと残つたシジミの味噌汁を飲む

挾躰 Vivienne Westwood 様

龍翔

サロメ

エリザベス2世のあとを追ひ掛けるやうにパンクの女王は逝きぬしばらくは家事手伝ひの妹の耳朵に輝くオーブが揺れる弘法にも筆の誤り ナオミ・キャンベルだつてファンウェイでつまづくポンテージパンツを履いた青年が寒々とゆく師走のミナミ革ジャンの黒なまめかし マフラーのタータンチェックの昏く燃えをりピストルズとか聴いてゐた なにもかも壊したくて抜いた髪の毛主人公より年下であつたのが二十年ほど生き過ぎてゐるUKに生きて行きたし Rest in peace. Vivienne Westwood.

冬凧

れいあむ

晦の蒼き街の灯を浴びて茫洋とする君のとなりで
声高く愚かでいたいと叫ぶ頬そつくり色の冬毒の実

隠れてる「君」がどこかにいると聞きコロナの海で桜待つ僕夜着の袖たどりし乾いた指先の愛しむ肌の沈む間に

昂みてはずんだ息を察じてはおんなんじ途を歩もうと決め灰白く光るスマホに君がいて寝酒の増えたぼく叱る夜ことことと白菜を炊く母ひとり想えばこそ帰らじの暮終夜の列車の番をする人の仮の寝床に波の花咲く



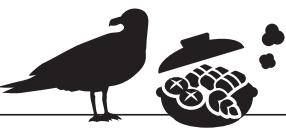


テーマ詠 「温」

あたたかくない手のひらが触れている肩甲骨の間から春
ぬくもりが伝わるような触れかたを記憶の中のきみはするのに
てのひらで手をあたためる いつせいにぼくらは冬に取り囲まれて
ふつふつと祈りの温度依存性 無毒のりんごを煮詰めるケース
省みて減った目たちが帰らない温かい手で目かくししてよ
温室でサボテン育ち昆虫が卵を産む砂虚構は要らない
温かい蕎麦のひとすじ掬いあげ二人静かに年を越す夜
アポロンとデイオニュソスらの温かな臨死体験後の足のうら
ハンバーグからずり落ちた温玉は明日のことを考えている
温もりをもとめて指で猫の毛を逆立てしづむ眠りの底へ
君の手を温めさせてくれないか君が命を絶たないように
きらきらと薄き陽ざしにぬくむ猫冬の運河のほとりに眠る
温泉のひなびた宿の将棋盤 桂馬がひとつビールの王冠
待ちわびる東の海に曙の恋はほのかに身を温める
犬小屋で一夜を過ごす鉛筆と靴の匂いに包まれて寝た

◆ 麻倉ゆえ
◆ 雨虎俊實
◆ 有村桔梗
◆ 歩歩
◆ 池田竜男
◆ 石川順一
◆ 一色凜夏
◆ 宇祖田都子
◆ 泳二
◆ さ
◆ 緒方燕柳
◆ 小崎ひろ子
◆ 音平まど
◆ 歌島孟
◆ 潤れ井戸
◆ 河岸景都
◆ 北谷雪
◆ 君村類
◆ 玖嶋さくら
◆ 熊谷聰子
◆ 咲兵衛
◆ 佐藤水魚
◆ 汐射ハルカ
◆ 西鎮
◆ 雀來豆
◆ 十条坂
◆ 白石夜花
◆ 泰源
◆ たえなかすず
◆ 高橋良

ストーブにやかんを乗せる 二人ともストーブ役だと思つてゐるけど
温かきみづの流れる音がして旧街道の舟場に出づる
残照 アールグレイに一日の花、一日の波が浮かんで
温かきみづの流れる音がして旧街道の舟場に出づる



冷えた赤い手で祈ろう 「あたたかく ありますように きみの未来が」
ねえ叱つて不器用に手をつないでてここだけ温い誘蛾灯みたい

ゆるやかにココアを溶けば世界から切り離されていく暗い部屋

しんしんと雪に凍みる手赤鼻の「あつたかいね」と握る君美し
まはらない電子レンジを買ひつる日の母の人差し指さびしさう

手袋のくすりの指が詰まるとき裏返しなる毛玉の生まれ

心臓は使い捨てカイロ ぼくたちはみんなだれかをあたためられる
あなたからみじかい懺悔聞く間にもホットココアはホットのままで

体温を分けあって暮らす明日もまた空がすつきり晴れたらいいね

左手の温度を右にわけながら回帰してゆく思考 朝焼け

ツバメ眠り夜風は雲をふきさらすどうぞ味噌汁は熱いうちに

部活終え電車で眠るぼくたちがふたりで共有している鼓動

温めてとろけるチーズ やわらかな触れ合い方をきみに教わる

さといもをたっぷりいれたのつpeiのあたたかきかなふるさとの味噌

ひとりでも歩いていけと生ぬるい風に両頬はたかれて 春

◆ 探偵とホットケーキ

◆ 千束

◆ 千原こはぎ
◆ 月草惣津久

◆ ともえ夕夏

◆ 中村成志
◆ 西淳子

◆ 西村曜

◆ 薄荷。

◆ 早月くう
◆ 曰笠山

◆ 廣珍堂

◆ 飛和

◆ 笛地静恵

◆ 福山桃歌

元彼や子のありなしを割愛し岩盤浴にならぶともだち
寒かると部屋に連れてく雪うさぎ吾子の手のひら水滴ぱたり
受け取つた傘の縁あなたの手の温度 雨に濡れてもひとりじやないの
季節なく咲くラベンダー温室のような彼から嗅ぎ取る疑惑

ぬくもりしか知らないみたい文末のひとつひとつにハート並べて
あたたかな場所でありたい泣いていた温度も熱も知識のなかで

温かい家庭を築いてくださいね ひとの恨みも燃え種にして

北極に行つた人から「常温で保存」と書かれた土産をもらう
冷蔵庫に入れ忘れてた室温のビールが飲み頃になつてゐる冬

重なると温みが積もる僕たちは生き方をまだ忘れていない
蕎麦つゆを温めている畢生を結ぶ言葉はまだ見つからない

大晦日感ないよね、と言ひながら今年も家族で囲むすき焼き
うつむいた睫にしづりの六花あり君の稚さを知りそめし頃

甘酒が配られてゐる街角できみの隣にゐたらよかつた
市街地に深杭を立て擁り取る温泉ははや地球の涙

トラックへ前日引かれた石灰の白線は、降雨により地面から飛散し難くなり、定着する。ハードルも白線も、主体の、もしくは読者への何らかのイメージとして配置されているのだろう。記憶、もしかすると未来から現在を振り返った、想定される記憶にも思えるが、それをちらちらとイメージしながら、自らの背中を押し、スタートラインに立つハードル走者の姿が見えた。

ハードルは倒しても良く白線の粉を定着させる秋雨

中村成志

一読して笑って、「ユリイカ」についてググった後にまた笑っちゃいました。シユールな感じが好きです。Wikipediaによると、古代ギリシャの学者アルキメデスがお風呂に入った際に水が溢れたのをみて、ある発見をして「ユリイカ（分かったぞ）！」と叫んだそうです。たぶん、このエピソードになぞらえた歌でしょうか。「ユリイカ」と呼ばない子を見て、作中主体が「赤ちゃんだった」とユリイカしているのもおもしろいです。

沐浴の溢れたお湯でユリイカと呼ばないから赤ちゃんだった

寿司村マイク

沐浴の溢れたお湯でユリイカと呼ばないから赤ちゃんだった

テーマ詠「果実」。
「ひとしきり」の不思議さが効いている。その後に三人称「彼」が出てくる。乾杯をする場にいる人物だろうか。下句をフランス語にすると、"Il est le vent français, saintel"である。'le vent'(風)は、'le vin'(葡萄酒)と音が似ている。葡萄酒のことを彼と表現しているのか。

「ひとしきり」は「風」の吹きゆくさまを修飾しているのかもしれない。

葡萄酒をください今夜ひとしきり 彼は
フランスの風、乾杯。

宮岡りょう

葡萄酒をください今夜ひとしきり 彼は
フランスの風、乾杯。

*Sorayumi
Urasora*

一首評「そらよみ」



前号の「うたそら」から

気になった一首をとりあげて

200文字くらいで語る

一首評のコーナーです

これまでの私のサンプルあるいは葬具空っぽの香水瓶がいとしい

北谷雪

連作「はなどびん」。二首目の不自由なびー玉は、ジャムを塗り合うあなたと私が外の世界に出られないことの喻えか。そのラムネの瓶が後の歌の瓶のイメージと膠着して、瓶の内外がクライインの壺のように接続する。そこでこの歌、空の香水瓶がサンプルでかつ葬具であるのは、カラスが美味しいと言った過去の私が入っていたからなのか、最後の歌でその瓶の中に入っただけを詰め込む。象徴的で不可思議な世界がありつけを詰め込む。象徴的で不可思議な世界が、連作の中に鮮やかだった。

佐藤水魚

歌意は素直だが、不思議な歌。もし雲が身じろぎする様を上空から眺めたとすれば、雲自身に遮られ地上で開く傘が見えない。逆に地上からだと、開く傘を数えられない。狭間の宙に漂っていたなら、視線を上下にせわしなく動かすことになってしまふ。

この情景を眺めているのは、複眼を持つ昆虫があるは全能の者か。降り始めた雨に濡れながら、視線はただ天空と地上を見つめているのだろうか。

始末書をサビ残で書くリーダーは獣の口で珈琲を飲む

連作「一日三度」からの一首。介護施設での出来事を淡々と、しかし正確に正直に歌いあげています。仕事後の一服こそ穏やかな時間であればいいのに、歌には雑にコーヒーを飲まざるを得ない切羽詰まり感が漂ってきます。「獣の口」の言い回し、この一言に職場環境の状況とそれへの想いが凝縮されています。読む人を選ぶ歌かもしれません、現状に思いを寄せて真正面から向き合つて読みたいお歌です。

涸れ井戸

涸れ井戸

涸れ井戸

本当に言いたいことを濾過したら残つた方が感情だつた

優しく揺れる感情がこころに響く連作。そして喻の巧みさに魅かれる。一首目の「濃く長い影」、三首目の「下水」等々。わかりやすくてさらりと書かれていて、なのに言葉が響いているのは、きっと本当に歌いたいことがきちんと込められているからだと思う。引用歌では「濾過」という喻が絶妙に面白い。いつたい感情はどうちに残つたのか。ろ紙の方なら結晶か塵か。ろ液の方なら残渣か無垢か?どちらにしても面白いのだから不思議。

君村類

君村類

君村類

週末の雨を報せる予報士の眼で告げられたさよならだつた

声ではなく「眼」、人をよく見ている主体だ。予報士にとつてみれば天気が良からうが悪からうが関係なく、ただ仕事だから伝えている。この伝達は大体言葉で行われているだろうから、週末に出掛ける予定がない限り画面の眼などは見ないし、見なくてよいのだ。でもその眼をしっかりと覚えていて、さよならを告げられているさなかに思い出してしまふ。どんな眼をしていたのだろう、それを思つだけでイメージの膨らんでいく一首。

西鎮

西鎮

西鎮

雀來豆

雀來豆

雀來豆

週末の雨を報せる予報士の眼で告げられたさよならだつた

君村類

君村類

君村類

白鯨が身じろぎすればひとつふたつ傘が開いてゆく人の波

佐藤水魚

歌意は素直だが、不思議な歌。もし雲が身じろぎする様を上空から眺めたとすれば、雲自身に遮られ地上で開く傘が見えない。逆に地上からだと、開く傘を数えられない。狭間の宙に漂っていたなら、視線を上下にせわしなく動かすことになってしまふ。

この情景を眺めているのは、複眼を持つ昆虫があるは全能の者か。降り始めた雨に濡れながら、視線はただ天空と地上を見つめているのだろうか。

短歌リレーコラム 七・望遠鏡 12



短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ

今号のテーマと書き手さんは…



テーマ お一人様吟行記

雨虎俊寛 書き手

梅雨明けが待たれる7月初旬に「お一人様吟行」をするため思い立つて奈良へ出かけた。それには訳があつて、歌友の豊増美晴（とよよん）さん発行の詩歌冊子「樂詩」の短歌コーナー「和いろdiary」へ7首連作を提出するネタ探しをするためにだ。

奈良と言つても東大寺、興福寺、春日大社などがある奈良公園はコロナ禍が緩みだした影響か観光客や参拝者、修学旅行生などであふれている。そんな所へ50歳になろうかというオッサンがお一人様でウロウロしているといったまれなくなる。なので、にぎわいから離れて訪ねたのが猿沢の池の南側一帯、元興寺の旧境内に当たる旧市街「ならまち」。近年ではお洒落な町家

こは奈良公園界隈だということを教えてくれる。幼い頃より何度も訪れていた僕には見慣れたものだけど、初めてきみを連れて来た時はニュースで見たままと言つてたつ。そして以前のグループ吟行の後で詠んだ歌を推敲し直した。

あおによし何度もお辞儀する鹿にきみと何度もお辞儀を返す

猿沢の池からまっすぐ南へ延びる道は「ならまち」の入り口の一つ。世界遺産でもある『元興寺』を目指す前に、池の西側に広がる花街としての歴史を有する元林院町周辺をそぞろ歩き。こここの町並みは今も昭和レトロ感ぶんぶんの飲食店やバー・スナックなどが立ち並ぶ歓楽街としての趣を強く残して、かつての花街らしく入り組んだ細い路地や複雑な構造を持つ建物も多く存在する。ここで詠んだ歌です。

花街をいまも残してならまちに浅紫のスナック看板

ならまち大通りを越えて『元興寺』へ。目当ての石仏群と桔梗は本堂の南側のやや奥に咲いている。ここは以前のグループ吟行では訪れなかつた。桔梗の時期では無かつたのもあるが、もうここに誰かを連れてくることは無いだろう。そんな場所だ。そして詠んだ歌です。

石仏のあいあいだに桔梗流れこの旅はもう

暑かつたのと平日でもう紫陽花が終わりかけで桔梗も咲き誇るほどでは無かつたこともある

カフエや雑貨屋さんが増えて人気のスポットになつてはきたが、昔からの暮らしが匂う町である。

さて、お一人様吟行をする場所として「ならまち」を選んだのは幾つか理由があつて、連作の提出先である「和いろdiary」には2つのお題が毎回課せられている。

・テーマ題「夢」

・カラーテーマ「桔梗色」

この2つの条件のもとで連作を編む必要があり、割と安直に「桔梗色」を詠み込もうと真つ

先に思い至つたのが過去に訪れて印象に残つた『元興寺』の桔梗、紫陽花という花たちで、桔梗が見頃だらうということ、それにワンコインで利き酒ができる『春鹿酒造』にも立ち寄りつつ、

ほろ酔いで路地、小路、丁字路など迷いそうになりながら巡る木造りの町家、庶民信仰や衰退した花街の名残。そんな暮らいや文化の匂いが漂う「ならまち」は懐かしく親しみやすく夢心地に浸れる町だなあと。コロナ禍前にグループ吟行で訪れているので、その時のストックもあるし住まう大阪の隣県という足の運びやすさもある。

そして何よりも僕がお一人様吟行をしがちな場所の条件として一番の理由となるのが未練を残す思い入れ深き場所。まあ、そんな理由付けて向かうことになった。

この日はとても暑い日だった。近鉄奈良駅の東改札口を出て、階段を上ると定番の待ち合わせ

向かうことにした。この日はとても暑い日だった。近鉄奈良駅の東改札口を出て、階段を上ると定番の待ち合わせ

せ場所である噴水の中に立つ行基像が涼し氣と/or>いうより、噴水が日差しを反射して暑さをぶり返させる。あの日もとても暑い日で先に待つていたきみが僕の手を取つて歩き出すも、土地勘の無さですぐに立ち止まつたのを不意に思い出した。やべえ……こういう気分に速攻？ 即効？で包まれると気もそぞろになり過ぎてメモを残し忘れる傾向にある。いくら相聞歌を詠みに来ているとしてもアカン過ぎるやろと、いつでもメモを取つたり、写真を撮れるように空いている右手にスマホを持って歩き出した。

駅前の東向き商店街はアーケード街であり、有名な漬け物屋や老舗のレストランなどが華やかに軒を連ねるが、無くなつた店もチラホラ散見する。ミスターードーナツは無くなつたがオムライスの『おしゃべりな亀』やベトナム料理の『コムゴン』、お好み焼き屋『おかる』などが今も営業していてホンの数十秒ずつ、それぞれの店先で立ち止まつた。

突き当たりの三条通りは市内のメインストリートで、古都の街並みをお目当てに来訪する外国人の観光客も多かつたが今はまばらだ。三叉路を左に曲がり、猿沢の池の方へ。高速餅つきでお馴染みの『中谷堂』はいつもの盛況さは無かつた。

猿沢の池の周囲はずいぶんと様変わりした。ストーリーで、古都の街並みをお目当てに来訪するターバックスがあるしそれだけで別の場所に来たような感覚に包まれるが、近づいてきた鹿がこ

のか、僕以外の参拝者も数えるほどだったので、作歌に浸るにはちょうど良かった。それなりにメモを取つたり、写真を撮りつつ寺を後にして少し東へ進む。もう一つの目玉というかお目当てのワンコイン利き酒をするために老舗の『春鹿酒造』へ向かう。あの日と同じ行程だ。あの頃はたしか400円だったか？ちゃんと思い出せないけど、レジにて500円で利き酒グラス(4色ある)を購入すると、店の奥の席に案内され、5種類の利き酒をした。利き酒グラスがこの時期がこの色だから来たかったのもある。そして詠んだ歌です。

ふじ色のお猪口受けとり春鹿でわかりもしない利き酒をする

利き酒が終わり、にごり酒がやっぱり好つきやなあと。奈良漬の試食もできて『春鹿』の酒粕で漬け込んだ奈良漬は全部で3種類あり、中でも燻製したうりの奈良漬がめっちゃ美味しい。最後にデザート日本酒ともいいくらい、美しい利き酒グラスも持ち帰れて、これで500円は工工もんやと大満足で後にしました。(消費税が上がる影響で12月30日に利き酒グラス持ち帰りは終了となり、別途販売になるそうです)

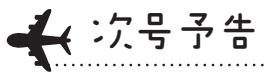
ほろ酔いにほど遠いけど気分良くなり、また西側に戻つて「ならまち」散策をする。「ならまち資料館」、『庚申堂』、『ならまち格子の家』を眺めながらただただ歩く。目を閉じてはいらないのにあ

ま、目的は達したので、この後は気持ちを切り替え知り合いのお店で薬膳ランチをいただき、多聞城跡を訪ねて帰路につきました。ちなみに「うたそら」用に追加された1首は今号でご確認いただければと思います。

Twitter
ハッシュタグ

#うたそら

「うたそら」では Twitter でのご感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。



第13号

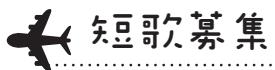
連作欄 8首の連作自由詠

テーマ詠欄 「2」

一首評「そらよみ」

短歌リレーコラム「望遠鏡」

リレーエッセイ「いちごいちえ」

第13号 メモリ 2周年!! /
23 2/28(火) 24時

•8首の連作自由詠 •テーマ詠「2」1首

第14号 メモリ
23 4/30(日) 24時

•8首の連作自由詠 •テーマ詠「本」1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

あけましておめでとうございます。本年も短歌誌「うたそら」をどうぞよろしくお願ひいたします。皆さまにとって、本年がすてきなこといっぱいの一年となりますように。

年末は大掃除もせず、珍しく早めに仕事納めをして、のんびり怠惰にみかんばかり食べて過ごしていました。そして年を越えて元旦。明け方まで「うたそら」を組むという贅沢な一年のスタートを迎えています。

次号は3月発行の2周年号です。
それにもかかわらず、テーマ詠のお題は「2」です。すてきな連作作品や一
首評など、お待ちしております!

編集鳥 千原こはぎ

今号のうたそら

第12号

参加歌人様 74名

連作欄 56名

テーマ詠欄 60名

一首評 8名

コラム 雨虎俊寛さん

エッセイ 武田ひかさん

illustration: kohagi chihara

『土佐の牧野植物園へ飛ばしたり日差しとなりてわたしのからだ』／渡辺松男（牧野植物園）について書かれた大森静佳さんの評文のはじまりに衝撃を受けた。その現代短歌二〇二二年十一月号にある評文のなかでは、一首の「て」に着目する。いい歌を取り上げているだけでなく、なぜ面白いのかというその本質に迫る技だと思った。はじめてその書評をみて痺れた時の感覚をよく覚えている。

「世の中には創造する天才があるように、探す天才もあり、書く天才があるように、読む天才語り部は君だったのだ風も星もそのくちびるは従えながら

『いちごいちえ』現れる武田ひか

品をさらに鮮やかにしている。わたしたちはつい作る人を上へ上へと持ち上げてしまいがちだが、一次作品を創造することだけが「創作」に関わる手段ではない。読むことや探すことにもクリエイティビティは宿るのだ。評文や感想文にはもっと可能性がある。短くともいい。心に触れた言葉を並べるだけでも。その営みはとてもも創造的だ。そうであつたほうが世界が楽しい。わたしは、そう信じている。

例えば、ちいさな感想を呟くことだけでも「創作」は作り手だけのものではなくなつて、受け手との相互作用を生み始める。良かつた作品を無地のノートに並べてみると。心に刺さつて抜け

世界は、あなたの声を、あたらしい眼の出現を待っているはずだ。探す才能や読む才能はまだまだ眠っている。たくさんの作品を浴びながら磨いてきた才能が（そう！才能とは磨くものであつた）、作品をさらに彩っていく。もし素敵なかを見つけたら、叫んでほしい。いや、叫ばなくてもいい。小さな声でも十分だ。ぼくも何か見つけたときには、あなたへと何かを伝えたいと思っている。作者だけでは千年残る作品は作れない。多くの人には渡せない。作品の光はひとりでには伝わらない。光を見つけ出して響かせるのは、わたしたちの眼や声なのだ。

武田ひか

もある。——ポール・ヴァーレリー——

最近、ポール・ヴァーレリーが書いたとされる言葉を見つけた。ポールヴァーレリーは19世紀から20世紀にかけて生きた人物だが、この言葉は誰もが創作者になり、コンテンツがあふれる現代においても金言である。作品に生かされているあなたの、愛をこめた叫び声が作品をさらに輝かせる。大森さんの眼から生まれた書評は、作品をさらに鮮やかにしている。わたしたちはついい作る人を上へ上へと持ち上げてしまいがちだが、一次作品を創造することだけが「創作」に関わる手段ではない。読むことや探すことにもクリエイティビティは宿るのだ。評文や感想文にはもっと可能性がある。短くともいい。心に触れた言葉を並べるだけでも。その営みはとてもも創造的だ。そうであつたほうが世界が楽しい。わたしは、そう信じている。

世界は、あなたの声を、あたらしい眼の出現を待っているはずだ。探す才能や読む才能はまだまだ眠っている。たくさんの作品を浴びながら磨いてきた才能が（そう！才能とは磨くものであつた）、作品をさらに彩っていく。もし素敵なかを見つけたら、叫んでほしい。いや、叫ばなくてもいい。小さな声でも十分だ。ぼくも何か見つけたときには、あなたへと何かを伝えたいと思っている。作者だけでは千年残る作品は作れない。多くの人には渡せない。作品の光はひとりでには伝わらない。光を見つけ出して響かせるのは、わたしたちの眼や声なのだ。

ない映画のフレーズをそつと引用してみる。その瞬間に埋もれていたかもしれない作品が、あなたの方で掘り起こされて姿を現す。声は表面についていた土や草を落として、やがて作品は輝きを強めていく。今まで見えていなかつたその鮮烈な光は、より多くの人の眼を奪つていてしまう。

世界は、あなたの声を、あたらしい眼の出現を待っているはずだ。探す才能や読む才能はまだまだ眠っている。たくさんの作品を浴びながら磨いてきた才能が（そう！才能とは磨くものであつた）、作品をさらに彩っていく。もし素敵なかを見つけたら、叫んでほしい。いや、叫ばなくてもいい。小さな声でも十分だ。ぼくも何か見つけたときには、あなたへと何かを伝えたいと思っている。作者だけでは千年残る作品は作れない。多くの人には渡せない。作品の光はひとりでには伝わらない。光を見つけ出して響かせるのは、わたしたちの眼や声なのだ。

- 27 -

- 26 -

うたそら 第12号

発行：2023.01.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>